

己心問答

守屋宣雄

先生。己心問題をわかり易くお話しして下さい。清水先生は六識陰妄の己心だと主張してゐるし、山川先生は佛果上の己心だと云つてゐる。それをいくらよんでも清水先生のを読んでゐる時は清水先生の方がよいと思はれるし、山川先生のを読めば山川先生の方が正しいと思はれてなりませんから、ごく簡単に僕等にもわかる様にお話しして下さい。

あれは色々論議すると益々わからなくなるから一つ譬をあげてみませう。その方が一番手取り早くてわかり易いやうです。相模川でも富士川でも、楊子江でもナイル河でもアマゾン河でも皆んなしまひには海に入つてゐる。世界中の河川はみんな大海とつながつてゐる。それが海にそゞろ所をみてゐると、どこまでが川でどこまでが海だか見當がつかない。暫らく地球からはなれて天上からこの大地をみるならば川は海から出た枝のやうにみえるであらう。それから海は川の親のやうにみえるであらう。全く海を心臓とすれば川は血管のやうなものである。海の水が蒸發して雲となり雨となつて川ができるのであるから、海と川は本来同じものでせう。たゞ縁に従つて川となつたり、海となつたり、湖水となつたりするのです。己心問題もさう云

ふ風に解釋したらよいと思ひます。凡夫の己心とは川の水であり、佛の己心とは海の水です。凡夫の己心を主張する人は川の水に浴しながら海の水をみてゐるのだよ。それから佛の己心を唱へる人は海水浴しながら川の水を論じてゐるやうなものだ。したがつて川からみれば川の水が流れ流れて海が出來たのである。海からみれば海水が蒸發したから川が出來たのである。これを高く星の世界から見下ろせば何れの立場も眞理であるが、何れもその一面に執して全体をみてゐないところは群盲象評のそしりを免れないであらう。

大分わかかつたやうな氣もしますが、しつくり來ませぬね。

さう云ふ一般己心論でなくて、もつとつきつめて本尊抄の己心についてお話しして下さい。

本尊抄には今本時の娑婆世界とあるでせう。本時の娑婆世界とは迷ひの眼でみた世界ではない。覺醒してみた本當の娑婆世界と云ふのですから、法華經の精神を信じた心の眼。法華經の教で凡眼を轉じて佛眼を開いた時にみえる世界を指してゐるのです。凡眼でみればこの世界は無常迅速四苦八苦の世界であるが、一度佛知見を開いてみればこの娑婆世界はこのまゝ常樂我

淨の寂光淨土である。そこだね。今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の淨土なりと云ふのは、それから佛すでに過去にも滅せず、未來にも生ぜずと云ふのは、さう云ふ寂光土に常住此説法してゐる本佛は本來不生不滅の久遠の生命を有してゐると云ふ事ですね。本當の佛は永遠に生きてゐるのです。決して死なない。今現に生きて居つて不眠不休で僕達を教化してゐるのです。不滅の眞理を時々刻々に説いてゐるのです。その次に所化もつて同体なりとあるのは、僕達のやうな所化もその眞体は不死不滅の久遠の生命であると云ふのです。次のこれ即ち己心の三千具足三種の世間なりと云ふのが問題の中心なのでせう。これは佛智佛眼を開いて久遠の生命を信解せよ。皆さんはこの久遠の生命を持つてゐるのだ。どこに持つてゐるかとか云ふと皆さんの己心の中に奥深く久遠の生命が輝いてゐるのだと云ふのです。己心の三千具足とは僕達の己心に三千の雑多なものが含藏されてゐると云ふ事を主眼としたのではなくて己心の中に佛性が輝いてゐる。本佛が己心の中に生きてゐると云ふ事をあらはしたものです。

さうすると本尊抄の己心と云ふのは僕等の己心と云ふ事ですね。佛の己心ではないね。

仲々つつこんで来るね。なる程己心とは己れの心だから僕達の心に相違ない。己心とは自己の心であると云ふことについては恐らく三世十方の諸佛にも異論はないだらう。

さうすると清水先生が勝つたと云ふ事になりますね。

己心問答

いやどつちが負けた勝つたと云ふのではなくて、今の己心は我等凡夫の己心だと云ふ事については間違ひないと思ひます。しかし常住の淨土や、久遠の本佛を己心の中に具してゐる事を忘れてはなりませんよ。我等凡夫の己心だと云つても早のみををして迷妄のやうな己心だと考へてはなりません。

さうすると先生は山川先生の信者の己心をとるのですか。

いや信者の己心にだけ事具三千があつて、未信者の己心には事具三千がないと云ふのではありません。法華經を信じてても信じなくとも心がある以上は久遠の佛性を持つてゐるのです。それから久遠の本佛も内在してゐるのです。

僕は先生の御意見が凡夫の己心だか佛の己心だか、はつきり聞きたいのです。

がつしりしてゐるね。はつきり云へば我等凡夫の己心ですよ但し迷つてゐる心ではないと云へます。法華經では迷つてゐる人を認めないのです。たとひ迷つてゐる様でもその人は必ず法華經によつて救はれる。法華經によつて自己の眞價を發揮する人々だと見るのです。迷へる人をもその迷妄をみずに直ちにその人の佛性神性を禮拜するのが本門の修行なのです。だから人々の心を見る場合もその心はみんな久遠の生命へつながつてゐる心だとみてゆくのです。火山から熔岩が噴湧するのは地球の内部に熔岩となる物質がぎつしりつまつてゐるからです。活火山の噴火口だけが火山の全体ではない。地球全体が火山の眞体なんです。だから噴火口をいくらコンクリでかためても、

出るべき熔岩は他の地殻を蹴飛ばしても噴出するであらう。さうしてとんでもない所に新らしい火山ができるかも知れないよ。丁度そのやうに本佛の久遠の光りは迷妄心の地殻を爆破して輝きわたるのです。久遠の太古から大衆救護の爲に十方に分身散体して説法教化してゐる本佛は、今尙現に生きてゐるのであるから、いつ僕達の迷妄心のかたい地殻を打ち破つて爆發するかわからない。と云つて迷ひの心を全々斷滅し盡すと云ふ事は不可能です。

元來この迷ひの心と本覺の佛とは同じもんだからね。本具煩惱元是菩提なんだ。それは地殻と熔岩とはもとくゝ氷炭相容れ

『戒体即身成佛義』に於ける

聖祖の見地を論ず

三 木 淨 達

『戒体即身成佛義』は聖祖御歳廿一才、仁治三壬寅年、故山清澄に於て、鎌倉御遊學の成果としてものせられた聖祖最初の御書である。

而して此御書は、正しく慈覺流の天台眞言に立脚して、日本

ぬものではなくて、地殻は太古時代の熔岩であり、熔岩は將來の地殻であるやうなものさ。たゞ迷ひの心を取り除いたその奥に本當の佛が生きてゐると云ふ事がわかればよいのです。

さうするとつまり本尊抄の己心とは。あゝ我等凡夫の己心です。それを六識陰妄だとか、佛果上だとか六つかしい事を云ふからめんだうになるんで聖人の御心境を忖度してはいけません。これをお書きになつた時の聖人の御心中を拜察すると、凡夫とか佛とか信者とか未信者とかに分別しない生れたまゝの己心を指されたものではないかと思ひます。

の淨土念佛の學者を破し、法華開會の戒体即成を顯はされたものである。今少しく史實と内容の両面からこれが考證を試みたと思ふ。

聖祖の時代は鎌倉中期で、承久の天下冠上のあつた後、天變